

キリスト教徒はフラを踊れるのか？

フラは「ダンス」か？「聖なるジェスチャー」か？

1970年代に始まるハワイアン・ルネサンスの中で息を吹き返したフラは、80年代に入るとハワイ人の伝統文化とアイデンティティを象徴するものとして、その重要性を増していった。文化復興運動や主権回復運動の中で、ハワイ文化のシンボルとしてフラが顕在化すると、キリスト教徒のハワイ人もフラに対して自らの立ち位置を明らかにする必要が出てきた。このような社会的状況において、ハワイ人キリスト教徒のアイデンティティを表明するものとしてフラが流用され、クリスチャン・フラとも呼ばれるフラが80年代末頃に誕生したことは既に紹介した通りである (*Glocal Tenri* 2011年8月号)。こうして1990年代に入ると、かつてプロテスタントの宣教師に異教の習俗として否定されたフラは、ハワイ人独自のキリスト教信仰を表すものとして、ハワイ人キリスト教徒の間に取り込まれていくことになる。彼らはそれ以前に全くフラを踊らなかったわけではないが、ある意図をもって意識的に教会活動の中にフラを取り入れる動きが出てきたのである。

しかし、教会内におけるフラの取り扱い、宗派を問わずデリケートな問題であった。例えば、1997年、マウイ島に住むカトリックの女性信徒が彼女の教会のミサでフラが度々踊られていることを不快に感じ、ホノルル教区に申し立て、さらにバチカンの典礼秘蹟省に訴えた。その結果、典礼秘蹟省は、礼拝式においてフラを含むあらゆる踊りを改めて禁じるようになった。このバチカンによるフラの禁止は、ハワイの地元メディアにおいて19世紀の宣教師によるハワイ文化の弾圧と関連づけて論じられ、物議を醸すことになる。翌年、ホノルル教区の司教とバチカンとの間で話し合いが持たれ、教区司教は、フラをハワイ人の「聖なるジェスチャー」として礼拝式で踊ることを認める新たなガイドラインを公表した。しかし、このガイドラインも礼拝式における踊りの禁止令を覆すものではなかった。娯楽ダンスとしてのフラは禁じられるが、祈りとしてのフラはハワイ人の文化的表現として許されるというガイドラインだけでは、キリスト教徒に許容される「聖なるジェスチャー」としてのフラの具体的な中身は見えてこない。

一方、会衆派教会のフラへの対応は、その独立自治の気風を反映して、教会によって全く異なった。私が調査を行っていた1990年代中頃は、徐々にではあるが会衆派ハワイ人教会にフラが取り入れられつつあった。だが、リベラルな教会では、フラ・カヒコでさえも教会内で踊られ、ウクレレなどの楽器も用いられていたのに対し、保守的な教会ではクリスチャン・フラを含むあらゆるフラを拒否し、楽器もピアノやオルガンに限定していた。また、個々のハワイ人キリスト教徒のフラに対する態度、すなわち、「キリスト教徒が踊ることのできるフラ」についての考え方も様々であった。ここでは、インタビューのデータを用いて、彼らのフラに対する多様な解釈と態度について紹介したい。

年配の男性牧師

ある時、私はフラについてある信徒と対話を持ったことがある。彼女はフラをずっと続けていて、今ではクム・フラ（フラの師匠）だ。私たちはフラの問題について長い話し合いを持った。

フラの免許皆伝の際にはラカ（フラの女神）の所に赴き、供物を捧げることになっている。私は彼女に「そんなことをしてはいけない。」とは言わなかった。私が彼女に言ったのはこうだ。「あなたは何者なのですか？ あなたはキリスト教徒ですか？ 信仰と行いにおいてキリスト教徒なのですか？ それとも時々教会に来るからキリスト教徒を名乗るのですか？ 洗礼を受けたがゆえに自分のことをキリスト教徒と考えるのですか？ でも、信仰と行いにおいて自分がキリスト教徒であると考えのなら、ラカのもとに行き供物を捧げるべきかどうか、自分自身で判断しなければなりません。ラカに供物を捧げることが、あなたの本当にしたいことなのかどうか考えるべきです。」これが全てだ。私は、これをすべきだとか、それをすべきでないとか命じたりはしない。人にはそれぞれの人生があるのだから、自分自身の責任において判断を下さなければならないのだ。

独立系教会の女性信徒

私は、美しい山々についてのフラを踊ったり、この島はこうだとか、あの島はああだとか、島々について歌ったフラを踊ったりする。でも、ペレ（火山の女神）の所に行くと、彼女を崇めるためにフラを踊ったりはしないわ。今、多くのハワイ人が行っているような、火山に登り供物を捧げるようなこともしない。彼らはその様な信仰を幼い頃から培ってきたわけでもないのに、主権運動の流れの中で過去の伝統に戻りたがっているように見える。もちろん、私は主権運動を支持するし、多くの土地が奪われたのは確かだと思う。でも、私は神を信じているのであって、（主権回復のために）ペレやロノやその他の神々を崇める過去の伝統に戻る必要はないと思うのね。子供の頃、私が伯母によく言われたのは、「それらの神々に敬意を払いなさい、でも私たちの神はただ一人だけ」ということ。だから、私たちは主権運動に携わる人たちをけなしているわけではなく、彼らと同じように神々を崇めたりしないというだけ。フラを踊ることになれば、（踊れないフラは）「踊らない」と断って、「この歌なら踊れるわ。あの歌なら踊るわ」と答えるの。

中堅の男性牧師

マウイ島からフラのグループが来たことがあった。彼らは、クリスチャン・フラのグループで、クリスチャン・フラを私たちと共に楽しみたいと考えていた。クム・フラは彼女のグループを率いて異なる教会を訪れ、教会の礼拝で「主の祈り」をハワイ語で歌い、それに合わせて少女たちがフラを踊る活動を行っていた。彼らは、ハワイ人教会の信徒たちが非常に保守的で、教会内でフラを踊ることに疑いの目を向けていることに気づき、自分たちのフラのビデオを作って私に送り、教会のクプナ（年配者）との話し合いの場で使ってほしいと頼んできた。

そこで、私は彼らにビデオを見せたんだ。この教会にはハワイ人のクプナもいれば、ハワイ人でないクプナもいる。驚いたことに、ハワイ人のクプナはビデオで見たフラに何の問題も感じなかったのに、ハオレ（白人）のクプナは気分を害していた。私は彼らに「なぜ不快に思うのか？」と尋ねてみた。「お尻を振って踊っている。」と彼らは答えた。「それはどういう意味なんだろう？」と尋ねると、「それは、卑しい振る舞いやマイ（生殖器

を歌った歌)の類の踊りを思い起こさせる。」と言う。だから、私はこう説いたんだ。「もし、あなたの物の見方がそのような型にはまったものなら、それに見合った物しか見ることができないだろう。でも、あなたの心が神の方を向いており、常に美しいものを見ようとするのなら、卑しさをそこにみつけることはないのではないか。物語を語る動きの中に美しさを見いだすのではないだろうか。腰を振るのはリズムの一部であって、物語を語るために踊り手はそのような動きをしなければならないのだ。」とね。これは5年ほど前の出来事だったと思う。それまでは、教会内でフラが踊られることなんてなかった。クプナの多くは、フラに抵抗感があって「ほら見てごらん、お尻なんかを振ったりして」と言うのが常だった。

でも、私たちはそのような考え方に挑戦しなければならない。なぜなら、私たちは洗脳されすぎてしまい、たった一つの考え方に固執するようになり、神を礼拝する方法は一つしかないと考えようになっているからだ。「ギターやウクレレではなく、ピアノやオルガンしか使えず、聖歌しか歌うことができない」というようにね。なぜいけないのか？そこで、私たちは挑戦することになった。今日、私たちの教会では独自のフラを踊り、教会活動に生かしている。会衆中には幾つかのグループがあって、ハワイの楽器、例えばギター、ウクレレ、オヘ・ハノイホ（竹製の鼻笛）、イブ（太鼓）を用いて演奏することもある。それは、教会の中で私たちの文化を祝福する行為でもある。

年配の女性信徒

土着の神々を賛美するフラ・カヒコをキリスト教徒のハワイ人が踊れるのかという問題は、確かに人を困惑させるわね。そうね、私自身もこのことについては疑問を抱えているの。どこまでが文化の領域なのか。文化と宗教の境界線はどこに引くことができるのか。依然としてこの問題を抱えている人はいるし、私自身も答えが見つかっていない。私が思うに、フラを踊る若い人たちは、自分たちが土着の神々を崇めているのか、それとも神々に対して踊っているだけ、すなわち文化の一部としてフラを踊っているのか、考えたことがないのじゃないかしら。でも、私が驚いたのは、去年の夏、カワイアハオ教会の礼拝式の中で、会場の端で控えていた一人の少女が立ち上がり、フラを踊り出したことね。そして誰もそれに異を唱えなかったの。今では、あの教会では普通にフラが踊られるようになったわ。

白人の男性牧師

この教会では、フラの問題については慎重であるように努めています。この問題についてはハワイ人信徒たちは苦心しています。なぜなら、以前は、クプナは非常に厳しい線引きをしていて、ハワイの文化的なものは一切教会に持ち込まないようにしていたからです。例えば、この教会のハワイ人信徒たちの多くは土曜の夜にはギターやウクレレを弾いて楽しめます。でも、教会の中で演奏することは頑なに断るのです。というのも、彼らの間では、ギターやウクレレはルアウ（宴会）のためのものであって、教会のためのものではないと教えられてきたからです。教会の中で歌う時には、ピアノとオルガンを伴奏に使う。それだけです。彼らはクプナが残したものをそのまま受け入れ

るのです。これまで私が見てきたところ、この数年間で（伝統文化に対する）彼らの頑なな感情はほぐれてきたようです。しかし、依然として彼らにはためらいがあります。

私は、彼らが礼拝の一部としてフラを用いても良いと考えますし、個人的には反対ではありません。しかし、彼らは、フラは教会の中であるものではないという考え方から抜け出せていないようです。彼らは、何よりもまず年配者の意見を尊重します。もしかしたら、神を尊敬する以上に年配者を尊敬しているのかもしれませんが、よく分かりませんが。それはそれで良いでしょう。私はフラの問題をことさらに取り上げません。しかし、彼らはそのうち徐々に頑なな態度を緩めていくと思います。ですから、この教会は、ある教会ほど伝統文化を取り込むことに対して強硬に反対しているわけでもなければ、他の教会のように革新的であるわけでもないのです。この教会のハワイ人信徒は、この問題について少しずつ考え方を変えており、過渡期にあると言えます。

中堅の男性牧師

フラは芸術だ。踊りも芸術だ。音楽も芸術、そして絵画も芸術だ。大事なことは、君の持っている技で誰を崇めるのかということだ。同じ音楽という技能を持っていても、悪魔を崇拝したり、人間を崇拝したり、神を崇拝したりすることができる。(用いられる)音楽が悪なのか？音楽は悪くない。悪いかどうかは、誰を崇拝するかによる。だから、もしフラ・カヒコがペレを崇めるために用いられるのなら、そのような行為はキリスト教の教会にとって悪いことである。しかし、神を崇拝するのに用いられるのであれば、フラ・カヒコを踊ることは悪いことではない。問題は踊り自体にあるのではなく、誰がその踊りによって崇拝されるのかという点にあるんだ。分かるかい。

中堅の女性牧師

まず第一に、私はクム・フラなの。フラの先生ね。クム・フラの地位は何年も前に得たけれど、いつの年だったか忘れてしまったわ。でも、私は約17年間、ラナキラ・ブラウンに師事してきた。私たちのハーラウ（フラ道場）はケアハフイラカオカフラハワイイといって、カヒコこそ私が情熱を注ぐもの。私はカヒコが本当に得意で、大好きなの。カヒコに対しては特別な愛情があるわ。「カヒコ」とは、単に「古代」「古い」「古典」という意味よ。でも、多くの人たちは「えっ、カヒコって、あなたはペレか何かを崇拝しているの？」って考えたりするのね…

今はそれほど踊ったりしないけれど、頼まれればすぐに教えることができるわ。物語を語っているフラ・カヒコ、歴史や伝説を劇化したフラ・カヒコを教えるの。ところで、多くのキリスト教徒にとって不幸なことに、ハワイの歴史の一部はペレの物語でもあるのね。でも、その物語を踊っているからといってペレを崇拝しているわけではないのよ。私が子供たちに言い聞かせるのは、あなたが物語を語る時、あなたは芝居をしているということ。あなたがロミオとジュリエットの舞台を演じている時、あなたはロミオでもなければジュリエットでもないでしょう。あなたは彼らではなくて、彼らの物語を演じているということね。フラにも同じことが当てはまるわ。